

Summer Flavor

Summer Flavor

作・中野浩作

登場人物

ヒイラギ K₃ . . .

宇宙船「アンセスタ」の保守点検要員、および現生人類調査員。
現生人類の精神に入り込み、文化や生活を体験する「トワイライト
ウォーク（宵闇歩き）」を担当している。覚醒年齢は20歳程度。

ネコ . . .

現生人類の少女。本名不明。
明朗快活で思ったことをすぐ口にする一方、自分の暮らす場所に
どこか窮屈さを感じている。

12歳の夏、ヒイラギの「宵闇歩き」の対象者となる。

OP 「夏の会話」(時系列・ヒイラギとネコの出会いから二年目)

静けさ。

音がない空間に、二人の女。

ヒイラギとネコ、向かいあいながらゆっくりと歩み寄る。

ふと、ヒイラギ、ゆっくりとした動作で空間の中央付近でうずくまる。

それは何かの工業機械がパーツを格納しているようである。

ネコ、ヒイラギの周囲をぐるぐると回る。まるで地球を回る月のように。

ネコ、何かの音を聞き取っている。

それは何の音だろうか。

宇宙に響く、聞いたことのない音だろうか。

それとも、この地球の上に響く、聞きなれた環境音だろうか。

しばらくの周回。

ヒイラギ、ゆっくりと、片腕を真つすぐに天へ向けて伸ばす。

それは誰かに助けを求めているようにも見え、何かを探し求めているようにも見える。

伸ばされた腕が宙をかく。

ネコ、ヒイラギの腕を周回している。

ふと、ヒイラギの手に触れる、ネコ。

二人の手が絡み合い、つながる。

ヒイラギ、ネコの支えを借りながらゆっくりと立ち上がる。

ヒイラギ、ネコ、向かいあう。

ネコ 「(目の前のヒイラギの姿に気が付くように) あ」

ヒイラギ 「(照れくさそうに) こんにちは。ネコ」

ネコ 「こんばんは。ヒイラギ」

ヒイラギ 「うん」

ネコ 「一年ぶり？」

ヒイラギ 「そう、一年と7日」

ネコ 「一週間もずれてんね」

ヒイラギ 「しょうがないんだよ」

ネコ 「そういうもん？」

ヒイラギ 「そう」

ネコ 「そか」

ヒイラギ 「元気だった？ ネコ」

ネコ 「ネコ？」

ヒイラギ 「そう、ネコ。ネコって、去年言ってた」

ネコ 「そうだった？」

ヒイラギ 「そう、ネコ」

ネコ 「うん．．．」

ヒイラギ 「何？」

ネコ 「いや、やっぱないかな．．．」

ヒイラギ 「え？」

ネコ 「もうちょっといい名前が」

ヒイラギ 「いいよ、変えても」

ネコ 「え、いいの？」

ヒイラギ 「何て？」

ネコ 「そうだなあ．．．」

ネコ、しばらく悩んで、

ネコ 「ウミ」

ヒイラギ 「いいよ、ウミ」

ネコ 「海、見たことないんだよねえ」

ヒイラギ 「宇宙からはよく見える」

ネコ 「上からじゃそりゃそうでしょ。そういうんじゃないんだよなあ」

ヒイラギ 「どういうの？」

ネコ 「（説明を考えながら）えっと、砂浜ってのがあってね、ずっと水があるわけよ。で、水平線ってのが見えて、ザザーンザザーンって、波が寄せては返すわけで、カモメとかいて」

ヒイラギ 「かもめ」

ネコ 「こそ、鳥ね。知ってる？ カモメ」

ヒイラギ 「ちよっと待って．．．（何かを調べる動作）」

ネコ 「．．．」

ヒイラギ 「えっと、チドリ目カモメ科カモメ属に分類される鳥の一種．．．鳥かあ」

ネコ 「ふん」

ヒイラギ 「違った？」

ネコ 「いや、そんなん知らんし」

ヒイラギ 「知らん？」

ネコ 「知らないって」

ヒイラギ 「知らないのに海に飛んでるのを知ってるの？」

ネコ 「海と言えばカモメでしょ。あと、パラソルと砂の城と日焼けと焼きそばと浮き輪と——」

ヒイラギ 「ちょっと待って・・・(何かを調べ始める動作)」

ネコ 「パラソルは、おっきい傘で、砂の城はどっかの子供がお父さんと一緒に作ったんだよ。で、焼きそばは不味いけど高くて、浮き輪に乗ったお姉さんが彼氏と一緒に波に乗ってるの」

ヒイラギ 「(難しい顔をしている)」

ネコ 「おい」

ヒイラギ 「(ものすごく難しい顔をしている)」

ネコ 「お~~~~い」

ヒイラギ 「・・・・・・あ！ わかった！ これが海かあ・・・」

ネコ 「うん」

ヒイラギ 「へへへ、これが海かあ」

ネコ 「そ、」

ヒイラギ 「じゃあ、これからはウミってネコを呼ぶね」

ネコ 「海って意味はわかった？」

ヒイラギ 「わかった。海水浴、日光浴、散歩など、リラックスやレジャーを楽しむ場所として親しまれている。シーズン、主に夏、になると、家族連れやカップルなどが集まる。シーズン後の海はごみで溢れて、地域住民からは迷惑の声が上がり——」

ネコ 「やっぱやめる」

ヒイラギ 「なんで？ 海、好きなんでしょ？」

ネコ 「好きじゃないよ、行ったことがないだけで」

ヒイラギ 「じゃあ、行けば？」

ネコ 「あのね、私は山の中の下田舎に暮らしてるんです」

ヒイラギ 「でも、行けるんでしょ？」

ネコ 「どんなけ距離あると思ってんのよ。大体、私ひとりじゃいけないし、」

ヒイラギ 「なんで？ なんでネコは遠くに行けないの？」

ネコ 「家族がいるから」

ヒイラギ 「家族に言えば？」

ネコ 「家族は忙しいの」

ヒイラギ 「家族は忙しいんだ。家族は暇にならないの？」

ネコ 「知らない。夏はやることたくさんあるんだって。田舎だから」

ヒイラギ「何が？」

ネコ「家族が。あんたも家族いるでしょ？」

ヒイラギ「ちよっと待って・・・（何か調べる動作）」

ネコ「え、嘘、家族知らないの？　なんで？」

ヒイラギ「・・・ああ、家族。わかった。」

お父さん、お母さん、血縁や婚姻関係、養子縁組などを基盤とした人々の集まり。
共同生活を営み、相互扶助を行う集団」

ネコ「いないの？　家族」

ヒイラギ「いるよ、家族」

ネコ「いるんじゃない。どんな感じなの、家族」

ヒイラギ「家族はね、寝てる」

ネコ「寝てる？」

ヒイラギ「ずっと、寝てる。起きてるのは私ひとり。みんな家族」

ネコ「みんな？　何人家族？」

ヒイラギ「10056人」

ネコ「は？」

ヒイラギ「家族の数」

ネコ「馬鹿にしてる？」

ヒイラギ「してない」

ネコ「あ、そ」

ヒイラギ「海、行かないの？　行けばいいのに、海」

ネコ「行ってほしい？」

ヒイラギ「うん。見たい、海」

ネコ「しょうがないなあ。じゃあ、今年はねだってみるかあ。あ、今年はどのぐらいいるの？」

ヒイラギ「ちよっと待って・・・明日から数えて7日」

ネコ「みじか。もうちよつといなよ」

ヒイラギ「無理だよ。私が決めてるんじゃないもん」

ネコ「まあ、しゃあないか。夏休みまだあるし、じゃあ、期待しないで待ってて」

ヒイラギ「うん」

ふいに、ヒイラギとネコの距離が離れる

ヒイラギ「あ」

ネコ「ん？」

ヒイラギ「時間だ」

ネコ 「みじか」

ヒイラギ 「じゃあ、ネコ、また明日」

ネコ 「うん。また明日。」

ヒイラギ」

ヒイラギとネコ、離れる。

宇宙空間を漂うように、ゆっくりと柔らかに距離を空ける。

ヒイラギ、再び格納されるようにうずくまっていく。

1 「夏の出会い」(時系列・ヒイラギとネコの出会い)

ネコ、うずくまるヒイラギの周囲をゆつくりと回りながら、

ネコ 「(作文を発表する子供のように) 随分と昔、地球はとっても汚れました。もう、いろんな国のたくさんさんの頭のいい人たちがきれいにする方法を一生懸命考えましたが、どうしようもないぐらいに汚れてしまった地球はどうしようもなくなっていました」

ヒイラギ、ゆつくりと体を開く。

しかし、その動きは人間の動きには見えない。

足ではなく、主に腕を伸ばして何かの作業をしている様子。

ヒイラギがいるのは宇宙に漂う宇宙船「アンセスタ」の船内である。

ヒイラギ「(ぼそりと) 残っている暑さが、がさがさとやってくる」

ネコ 「地球はどうしようもなくなっていましたでしたが、地球から脱出する方法は発見できたので、偉い人たちは一生懸命宇宙船を作りました。大きな大きな宇宙船でしたが、地球に住んでいるみんなを乗せることはできませんでした」

ヒイラギ「水分がしみわたってゆく、すぐに、蒸発していく、自らの水が、」

ネコ 「宇宙船の名前はアンセスタと言いました。ご先祖様、っていう意味です。ご先祖様は汚れてしまった地球を離れて、宇宙空間へと飛び立ちました。宇宙から見る地球は、それはもう、ひどい有様でした。汚くて、濁っていて、これが本当に青くて綺麗な地球だったのかと、ご先祖様に乗った人たちは涙を流しました」

ヒイラギ「6500ケルビンの青空が、疑いもなく続いている、どこまでも、青さを伴った青い空が」

ネコ 「そうしてご先祖様は、地球のえいせいきどうじょう(衛星軌道上)に乗り、地球の様子を観察することになりました。そうして長い長い長い長い長い、ながい時間がたくさんたくさんたくさんたくさん、たーっくさん、過ぎていきました」

ネコ、子供のように空間を歩く。

ヒイラギ、無重力空間の中を進むように両腕を泳がせながら、作業を行っている。

ヒイラギ「(いくらかはつきりと) 報告記録。

西暦AA4588(ダブルエー ヨンゴーハチハチ)、基準日時、07201600(ゼロナ

ナニーゼロイチロクゼロゼロ)、管理報告者、ヒイラギK73」

ネコ 「はじめとした、ぶんさんしたねつが、まだ漂っている」

ヒイラギ「記録。これより最初のシンクロ作業に移る。対象地域については前任のヒイラギ E03 により選定済み。ヒイラギ E03 はシンクロ対象者を発見できなかった模様。作業可能時間は対象地域―アンセスタ距離間から3時間程度と想定」

ネコ「りそうきょうとしてのいいごちのいい夏はそんざいしないのである」

ヒイラギ「冷凍睡眠から目覚めてから、まだ1時間も経過していない。もう仕事をしなきゃいけない。覚醒前に栄養剤は注入されているから、ぼんやり感とかはないけど、うんざりするなあとthinkながら、歴代の前任者の引継ぎを確認する。

直前の前任者であるヒイラギ E03 はもう冷凍睡眠装置の中で、いつ目覚めるのかわからない眠りの中にいる」

ネコ「ひといきれのなかを、かきわけながら、たちかえるわれに、わすれない」

ヒイラギ「前任者はシンクロ可能者を見つけられなかった。10年間の作業記録は睡眠装置の保守点検報告と、対象地域の選定作業の報告のみ。

およそ200名に及ぶ前任者たちの中でシンクロが可能だったのは、2000年間で23名。うち、まともな意思疎通に成功したのは1名。最後の意思疎通の記録は300年前。ただし、機材の老朽化による不調の為、報告レポートに情報欠損あり。

・・・10年の任期の間に、154個の冷凍睡眠装置の故障を確認、同数の乗組員が死亡、あるいは行方不明となっている。

・・・もうすぐ、残りのアンセスタの乗組員は、一万人を切る」

ネコ「じめんがゆれているようにみえる」

ヒイラギ、ゆっくりと立ち上がり、宇宙船の小窓から地球を眺める。

ネコと向き合っている格好になる。

ヒイラギ「アンセスタはうなり声をあげている。この宇宙船はいつまで地球の周りをまわっているのだろうか。管理室の小さな窓の向こうには真っ黒い宇宙空間と、青く美しい地球の姿が見える」

ネコ「長い時間の中、ご先祖様の乗組員たちは待ちました。地球が再生するまで待ちました。けど、いつになったら地球が良くなるのかわからなかったので、みんな眠って待つことしました」

ヒイラギ「そして、アンセスタは待った」

ネコ「ずっと待った」

ヒイラギ「眠って」

ネコ「いつまでも眠って」

ヒイラギ「順番に一人ずつ目覚めて」

ネコ「順番に地球を観察して」

ヒイラギ「いつか帰りたい」

ネコ 「いつになったら帰れるのだろうか」

ヒイラギ 「そうしてようやく」

ネコ 「地球は青さを取り戻した」

ヒイラギ 「だから、」

ネコ 「ご先祖様は船の中にあるたくさん種の種を地球に戻しました」

ヒイラギ 「菌類」

ネコ 「植物」

ヒイラギ 「虫」

ネコ 「魚」

ヒイラギ 「動物」

ネコ 「そして最後に、人間」

ヒイラギ 「たくさん種の種を戻して、さらに長い時間が経って、」

ネコ 「(元氣よく) ついに! ご先祖様は地球に戻る計画を立てたのです!」

ヒイラギ 「プラン名・トワイライトウォーク。通称・宵闇歩き」

ネコ 「お化けの出てきそうな名前の計画」

ヒイラギ 「観察対象地域の現生人類の精神に干渉し、地球環境と現生人類の文化レベルを調査する」

ネコ 「一年の間の一日の」

ヒイラギ 「あつという間の決まった時に」

ネコ 「ご先祖様が人の心へ乗り移り、そうして、人になって過ごしてく」

ヒイラギ 「現生人類にとって、アンセスタの人類はもはや宇宙人だ」

ネコ 「だから調べなきゃいけない」

ヒイラギ 「育った種の状態を」

ネコ 「育った種の文化と知能を」

ヒイラギ 「私たちを受け入れられるか」

ネコ 「ご先祖様と一緒に生きられるか」

ヒイラギ 「侵略者にならないか」

ネコ 「戦争にならないか」

ヒイラギ 「だから、調べなきゃいけない」

ネコ 「(ヒイラギに向けて) 私たちを?」

ヒイラギ 「そう、あなたたちを」

ヒイラギ、ネコ、互いにゆっくり近づく。

二人 「推定地球時間、西暦2001年7月21日 16時30分 特定地域、旧亜細亜大陸

極東部 旧日本国愛知県三河地区山中集落 宵闇歩きシンクロ可能者選定」

ヒイラギ「実行」

ネコ「可能者発見できず」

ヒイラギ「実行」

ネコ「可能者発見できず」

ヒイラギ「実行」

ネコ「可能者発見できず」

ヒイラギ「地域微調整、作業続行」

ネコ「実行」

ヒイラギ「可能者発見できず」

ネコ「実行」

ヒイラギ「可能者発見できず」

ネコ「実行」

ヒイラギ「可能者発見・・・・・・発見!？」

ネコ「宵闇歩き、シンクロ可能者発見。推定年齢」33歳 女性 健康体

ヒイラギK「3、シンクロ実行しますか？」

ヒイラギ「・・・マジ？」

ネコ「まじ」

ヒイラギ「じゃあ、実行します」

ヒイラギ、ネコ、ハイタッチ。

ヒイラギ、倒れる。

ネコ、大きく立ちくらみをして、いきなり倒れ込む。

ヒイラギの精神、ネコの体に入り込む。

地球の上に、ネコの体を借りて立つヒイラギ。

夕暮れ時である。見事な夕焼けが見える。

ネコとヒイラギ「(頭がくらくらしている)・・・うわあ、重っ・・・」

これ、重力・・・？ 重た・・・」

ネコ、四つん這いになりながら、ゆっくりと立ち上がる。

※ヒイラギは倒れたままである。

ネコとヒイラギ「う~~~~ん・・・。よいしょ」

ネコ、立ち上がる。

ネコ「ヒイラギ」(自分の足を見て) 足? ……。現生人類、やば……すご……。
(腕を見て) わあ、指短っ。どう動かしているのか……」

ネコ、しばらくもぞもぞと体を動かしている。
そしてやや落ち着くと、ネコ、少しふらつきながらあたりを見回す。
物珍しいものを見るようにしばらく周囲を見回し、空を見る。

ネコ「ヒイラギ」……あれ? 青くない。赤い……。青い空は?
でも、きれー」

ネコ、夕焼けに見とれる。
と、

ネコ 「(苦し気に絞り出すように) ちょっと、なに」
ヒイラギ 「(寝転がりながら) え?」

ネコ 「なにこれ、どうなってんの?」

ヒイラギ 「お邪魔してます」

ネコ 「お邪魔? どこに?」

ヒイラギ 「あなたの体……? 正確には脳みそ」

ネコ 「は?」

ヒイラギ 「だから――」

ネコ、首から下が動かない。

ネコ 「(冷静に、だがだんだんと焦ってくる) 何、幽霊?
幽霊に乗り移られて、体勝手に動かされてんの私?」

ヒイラギ 「あの、」

ネコ 「勘弁してよ、お盆はまだだよ」

ヒイラギ 「あの、」

ネコ 「てか、私、幽霊と会話してる?」

ヒイラギ 「あの、……あなたの名前を教えてください」

ネコ 「は?」

ヒイラギ 「あなたの名前」

ネコ 「(パニック) 名前聞いてどうすんの。」

そういうのって教えたら、あんたが私に成り代わって、私の代わりの生活して、
私はがりがりにやせ細って死んじゃったりするんでしょ? 『私を返して』

』とかって恨み言を言って、そんで、その乗り移ってきた幽霊に今度は私がな
っちゃうんじゃない！ やっぱ幽霊じゃん！ そういう怪異みたいなやつじゃ
ん！」

ヒイラギ「落착着いて」

ネコ「落착着けるか！」

ヒイラギ「なんで空は青くないの？」

ネコ「・・・・・・はあ？」

ヒイラギ「地上から見た空は青いって記録があるから」

ネコ「（戸惑いながら）・・・・夕焼けだから」

ヒイラギ「夕焼けは青くないの？ なんで？」

ネコ「え？ 理科でやったな。なんだっけ・・・・」

ヒイラギ「ちよつと待って、調べる・・・・」

ネコ「・・・・あ」

ネコとヒイラギ「夕焼けが赤く見えるのは、太陽の光が大気を通る際の距離が長くなって、
青い光、短い波長の光が散乱されてしまひ、赤い光、長い波長の光だけが残
って届くから」

ヒイラギ「へ・・・・」

ネコ「・・・・ねえ、」

ヒイラギ「ヒイラギと言ひます」

ネコ「あ、そ。じゃあ、ヒイラギ、さん？ は、幽霊じゃない？」

ヒイラギ「私は――」

ヒイラギ、起き上がる。

ヒイラギ「乗り移った女の子に話をした」

ネコ「詳細は省略。さっきの宇宙に逃げた人類の祖先がどうのこうの、って話をヒイラ
ギはしてくれた」

ヒイラギ「話をしている間、彼女は」

ネコ「マジわけわからん」

ヒイラギ「と言ひ続けていた。けれど、私が彼女の中に入っている経緯は理解してもらえた」
ネコ「つまり、ヒイラギが私に入って、私と一緒に生活して、今の人類がどんな生活し
ているのかを調べるのが仕事ってことで、いいの？」

ヒイラギ「そう」

ネコ「はあ・・・・。何それ、すごいSEなんだけど。でも、そういうのってもっと町の
方でやった方がいいんじゃないの？ 文化とか、そういうの調べたいんでし
よ？ こんな山の中じゃ何にもないよ？」

ヒイラギ「場所が限られてる」

ネコ「あ、そ。」

（深刻そうに）で、私はこれからずっとあんたが頭の中に入ったままなの？ 二重人格みたいになるの？」

ヒイラギ「いいえ、今日はあと30分ぐらい」

ネコ「（何か少し残念そうに）みじか。何にもわからないでしょ？ そんなの」

ヒイラギ「今日から1日間、この時間帯にあなたにアクセスする。」

一度の滞在時間はおおよそ1時間程度」

ネコ「あゝ、なるほど。そういう感じなんだ」

ヒイラギ「問題なければその周期で毎年」

ネコ「毎年！？」

ヒイラギ「地球の自転とアンセスタの軌道の関係」

ネコ「SFっぽく」

ヒイラギ「しょうがないの」

ネコ「じゃあ、これから毎年、夏の夕方にヒイラギが私の中にやってくる、ってことでOK？」

ヒイラギ「OK。構わない？」

ネコ「ん？ 選択権あるの？ そういうのって、こっちが文句言っても聞いてもらえないんじゃないの？」

ヒイラギ「私たちは侵略者じゃない。ただ、帰りたいだけ」

ネコ「（少し残念に思いつつ）あ~~~~そ~~~~」

ネコ、しばらく考えて。

ネコ「いいよ」

ヒイラギ「よかった」

ネコ「これからよろしく、ヒイラギ」

ヒイラギ「よろしく、えっと・・・あなたの名前は・・・」

（ネコの記憶を見て）あ、わかった」

ヒイラギ、ネコの名前を呼ぼうとするが、それを遮って、

ネコ「ネコ」

ヒイラギ「ネコ？」

ネコ「ネコって呼んで」

ヒイラギ「でもあなたの名前は」

ネコ 「いいの、ネコで。せっかくなにか面白い感じなのに。

ヒイラギ 「ほんとの名前じゃ面白くない。私は自由に生きたい、猫なのです。にゃん」

ネコ 「猫は自由だよ」

ヒイラギ 「(ネコを指さして) ネコは自由じゃないの?」

ネコ 「だってまだ中学生だよ? 田舎の中学生に自由なんてありません」

ヒイラギ 「なりたいたい自分に名前を付けるの? それが地球の風習?」

ネコ 「かもね」

ネコ、笑う。

ヒイラギ、きょとんとしている。

ネコとヒイラギ、振り返り、背中合わせで距離を空ける。

ネコ 「それから毎年」

ヒイラギ 「私はネコの中に入ることになった」

ネコ 「夏の夕暮れ、夕方の」

ヒイラギ 「空の青さが薄らいで」

ネコ 「西のお山が赤くなり、」

ヒイラギ 「東の空が紺色に、」

ネコ 「染まって夜の来る前の」

ヒイラギ 「昼と夜の間の時間」

ネコ 「いよいよ夜の来る前の一人で歩く田舎道」

ヒイラギ 「宵闇歩くその、後ろ姿に」

ネコ 「声が、する」

ヒイラギ 「(振り返って) こんにちは、ネコ」

ネコ、ヒイラギを向く。

ヒイラギ 「教えて、地球のこと」

2 「夏の過ごし方」(時系列・ヒイラギとネコ出会ってから三年〜七年)

ネコ、急に元気よく、夏の日差しのように。

ネコ 「毎年毎年ヒイラギは私の中に入ってくる。

ヒイラギは私たち現生人類？ よりもずっと進んだ進化をしているはずなのに、知らないことが結構多い。なんでそんなにやたらに質問してくるのか聞いたら――」

ヒイラギ「今の人類がどの程度の知能レベルがあって、感受性のレベルがあるのか知りたい」
ネコ 「ということなんだそうで。

仮に、宇宙船の乗組員が地球に降り立った時、その時の地球人が自分たちを受け入れられる文化レベルに達しているのか知りたいんだそうだ。あとは――」

ヒイラギ「宇宙船がおんぼろで情報が壊れている」

ネコ 「(うんざりした様子で) そういうことで些細なことでもすごい聞いてくる」

ヒイラギ「(何かを指さして) あれなに？」

ネコ 「山、私の住んでるところを囲んでるの。壁みたい」

ヒイラギ「壁じゃないよ」

ネコ 「知ってるよ。じゃあ、塀かな。私はここから出られない」

ヒイラギ「塀じゃないよ。山でしょ？」

ネコ 「知ってるよ」

ヒイラギ「山は壁じゃないし、塀じゃないよ」

ネコ 「比喩って知ってる？」

ヒイラギ「物事の説明や描写に、ある共通点に着目した他の物事を借りて表現すること。たとえること。その表現」

ネコ 「知ってるじゃん」

ヒイラギ「何を共通と感じているの？」

ネコ 「そういうのは察してよ」

ヒイラギ「何を？」

ネコ 「(イライラして) ああ！ もう！！」

ヒイラギ「出られるよ。山は壁じゃないし、塀じゃない」

ネコ 「知ってるよ」

ヒイラギ「じゃあ――」

ネコ 「うるさい！」

ネコ、ヒイラギから距離を取る。

ヒイラギ、気にせず、ネコの手を取り、何かを指さし、

ヒイラギ「ねえ、あれはなに？」

ネコ「（ヒイラギを見て哑然として）あのねえ・・・」

ヒイラギ「教えて、ネコ」

ネコ、ヒイラギの顔を見つめて何かをあきらめたように大きくため息をつく。

ネコ「あゝゝゝ、もう。私一人っ子なんだけど？」

ヒイラギ「それは知ってる。兄弟や姉妹がいないこと」

ネコ「そういう意味じゃない」

ヒイラギ「どういう意味？ 兄弟いるの？ そんな記憶、ネコの頭にはないよ」

ネコ「ヒイラギは私の祖先様みたいなもんなんでしょ？ なのに、ちっちゃい妹みた
いだってこと」

ヒイラギ「（感動して）それ、比喻だ！」

ネコ「（うんざりして）・・・はい、正解」

ヒイラギ「じゃあ、姉は妹の世話をしないと」

ネコ「はいはい」

ヒイラギ、次々と目に付くものを指さしていく。

ヒイラギ「あれ何？」

ネコ「あれは風鈴」

ヒイラギ「あれ何？」

ネコ「あれは蚊取り線香」

ヒイラギ「これ何？」

ネコ「これはかき氷」

ヒイラギ「何してるの？」

ネコ「宿題」

ヒイラギ「この人たちは誰？」

ネコ「前教えたでしょ。お父さん、お母さん、家族」

ヒイラギ「これが家族か・・・お父さん、って呼んでみてもいい？」

ネコ「ヒイラギが？ （怪訝な顔で）・・・いいよ。変なこと言わないでよ」

ヒイラギ「わかった」

ヒイラギ、ネコの体を使って、

ネコ ♪ ヒイラギ「お父さん！（何か話しかけられて困る）・・・え？ いや、えっと、別に

何も。えっと・・・。あ、お父さん、私、妹が欲しい！」

ネコ 「（ヒイラギの口を押えて）くおらあ！！！！」

（お父さんに）何でもない、なんでもないから！！！！」

ネコ、ドタバタとヒイラギを連れていく。

ネコ 「もう！ そういうのするなら体貸さないよ！」

ヒイラギ「（興奮して）あゝ、ドキドキした。これが興奮かあ」

ネコ 「も~~~~」

ヒイラギ「あ」

ネコ 「え？ 時間」

ヒイラギ「うん。また来年。ネコ」

ネコ 「うん。またね、ヒイラギ」

ネコとヒイラギ、遠ざかり、再び近づく。

※以後のやり取りの中で、ヒイラギの感情が少しずつ育っていく。

ヒイラギ「こんにちは。ネコ」

ネコ 「こんばんは。ヒイラギ」

ヒイラギ「これは何？」

ネコ 「これは猫」

ヒイラギ「これが猫かあ！」

ネコ ♪ ヒイラギ、猫を掴む。どうやら尻尾を掴んでいる。

ネコ 「待って待って、そんな持ち方！」

ヒイラギ「え？」

ネコ 「（猫を抱っこして）こう！」

ヒイラギ「こうかあ。」

あったかい。柔らかい。

（猫が逃げる）あ・・・。どこに行くの？」

ネコ 「さあ、猫は自由だから」

ヒイラギ「ネコはまだ自由じゃないの？」

ネコ 「どうだろうね」

ヒイラギ「あ」

ネコ 「じゃあ、またね、ヒイラギ」
ヒイラギ 「また来年、ネコ」

ネコとヒイラギ、遠ざかり、再び近づく。

ヒイラギ 「こんにちは。ネコ」

ネコ 「こんばんは。ヒイラギ」

ヒイラギ 「視線が高い」 ん？ なんか高い」

ネコ 「ちよつと背が伸びました」

ヒイラギ 「すごいすごい。人間って伸びるんだ！」

ネコ 「ゴムじゃないんだから。ヒイラギは伸びないの？」

ヒイラギ 「遺伝子工学の賜物で」

ネコ 「そうなんだ」

ヒイラギ 「体重も増えないよ」

ネコ 「いーなー」

ヒイラギ 「あれ？ これ何？ 宿題？」

ネコ 「ああ、これは受験勉強」

ヒイラギ 「受験って何？」

ネコ 「自由になるための努力かな」

ヒイラギ 「自由になれそう？」

ネコ 「どうかな」

ヒイラギ 「そうだ。海はまだ見れないの？」

ネコ 「（にやりと笑って） へへへ」

ヒイラギ 「何？」

ネコとヒイラギ、腕を伸ばす。

ヒイラギ 「なんか茶色い。病気？」

ネコ 「違う、私の記憶見ればいいじゃん」

ヒイラギ 「んゝゝゝ？ （何かを見つけて） あ！ 海！」

ネコ 「行ってきました学校の友達と」

ヒイラギ 「ずるい！」

ネコ 「だって、あんた微妙に来るタイミング違うんだもん」

ヒイラギ 「今年は？ もう行かないの？」

ネコ 「ヒイラギいるうちは無理かなあ、勉強あるし」

ヒイラギ 「えゝゝゝ」

ネコ 「ふふ」

ヒイラギ 「何？」

ネコ 「いや、なんか」

ヒイラギ 「え？」

ネコ 「人間なんだって」

ヒイラギ 「人間だよ？」

ネコ 「ほんとに宇宙人みたいだった、初めての時」

ヒイラギ 「住んでるのは宇宙だけど」

ネコ、ヒイラギ笑う。

ヒイラギ 「あれはセミ？」

ネコ 「そう、セミ」

ヒイラギ 「アブラゼミ、ツクツクホーシ、ヒグラシ」

ネコ 「ヒグラシはまだかな。お盆を過ぎたぐらいだよ」

ヒイラギ 「お盆にヒグラシを乗せるの？」

ネコ 「違う違う。お盆はそういう時期のこと」

ヒイラギ 「何する時期？」

ネコ 「んー、ご先祖様が帰ってくる時期だよ」

ヒイラギ 「・・・ゾンビ（になって）？」

ネコ 「どこで覚えた。違うよ。そういうんじゃない」

ヒイラギ 「ふうん。もうすぐ？」

ネコ 「来週かな？」

ヒイラギ 「そっか。ご先祖様が帰ってくるのか」

ネコ 「キュウリで馬作っておくよ、来年。ヒイラギの為に」

ヒイラギ 「（顔をしかめて）意味が分からない。何それ」

ネコ 「だってあんた、ご先祖様なんでしょ。早く帰って来れるように、お祈り」

ヒイラギ 「ふうん。よくわかんない」

ネコ 「私も」

ネコ、ヒイラギ、再び笑う。

ヒイラギ 「あ」

ネコ 「時間？」

ヒイラギ 「うん。また来年、ネコ」

ネコ 「また来年、ヒイラギ」

3 夏の別れ

ネコ、ヒイラギから離れていく。

その後ろ姿を見つめているヒイラギ。

だんだん、と手足を折り曲げて小さくなり、宇宙船の中へ。

ヒイラギ「一年、一年と過ぎていく」

ネコ「（空間に響くように）青々とした緑が、緑々（みどりみどり）とした深緑が」

ヒイラギ「ネコと過ごす夏を一年の間ずっと待っている」

ネコ「純粋な心持ちで待っている。まとまりのないミトコンドリアの、精密な時計」

ヒイラギ「アンセスタがうなり声をあげている。冷凍睡眠装置はどんどん壊れていく。不要となった箇所を切り離して、家族が、真っ黒い宇宙の中に消えていく」

ネコ「魚の群れがぼんやりと見えてくる。海の、船の、穏やかな、楽観的な観覧車が」

ヒイラギ「ここは寒いよ、ネコ。」

ネコに会いたい。

地球の、夏の匂い。暑い、緑の匂い、蚊取り線香の匂い、かき氷は冷たくて、アブラゼミは喧しい、猫は暖かく、柔らかい。

地球に帰りたいよ、ネコ。私は、眠りたくない。眠ったら、一人になってしまう。

また来年。早く来年が来ないかな。ここは、寒いよ、ネコ」

ヒイラギ、うずくまり、動かなくなる。

ネコ、自分の部屋の中で、窓から空を見上げるように。

ネコ「来年、うまくいけばこの街を出られる」

ヒイラギ「（一人で孤独に）地面が揺れているようにみえる」

ネコ「ずっと窮屈だったあの街を出られる」

ヒイラギ「風によって冷却される、額から流れる汗が」

ネコ「ヒイラギは何なのだろうと思う」

ヒイラギ「アスファルトに落ちたかき氷が、瞬く間に消えてゆく」

ネコ「毎年夏にやってきて、勝手に人の体で過ごして勝手に帰ってく。子供の私はよくそんなの受け入れたなあと、思う。なんか、きつと、人とは違うことが単に嬉しかったんだと思う。時々、何でもない時に、ヒイラギの声が聞こえる気がする。冬の、雪で真っ白になって、柵の葉に魚の頭が刺さってるのを見ると、なんか笑えてくる。だって、夏にしか来ないのにヒイラギだって。きつと、ご先祖様にいる人達はそんなことさえも忘れてしまいうぐらい、長いこと真っ黒いところにいるんだと思う」

ヒイラギ「つくりかけの彫刻が、刻一刻と黙々と、迫りくる、崩壊に向かって」

ネコ「ヒイラギは」

ヒイラギ「ネコは」

ネコ&ヒイラギ「今、何をしているのだろう」

ネコ、ヒイラギを抱き寄せるようにして起こす。

ヒイラギ「こんにちは。ネコ」

ネコ「(どこか自慢げに) こんばんは。ヒイラギ。タイミング、ドンピシャ。やるね、あたし」

ヒイラギ「違和感を感じて」あれ？ なんか変わった？」

ネコ「あ、わかりますか？」

ヒイラギ「(ネコの容姿を見て) なんか、なんか、変」

ネコ「ちょっと」

ヒイラギ「何が違う？」

ネコ「一人暮らし始めたよ」

ヒイラギ「は？」

ネコ「山ん中出て、町で大学生をしています」

ヒイラギ「大学生って何？」

ネコ「高校の上の学校」

ヒイラギ「大学生は一人で暮らすの？ そういう刑罰？」

ネコ「違う違う。大学は遠いところにあるから、ここからじゃ通えないの。だから、ヒイラギ来るの、こっちで待ってたの」

ヒイラギ「ちょっと待って(頭の中を覗く)」

ネコ「あ、こら、覗くな！」

ヒイラギ「これは、友達？ たくさん。町、うわあ、すごい。こんな感じなんだ。匂い、臭い。車？ うるさい。・・・あれ？ お父さん・・・じゃない・・・男の人？ 誰？ (キスなどをされる記憶を見て、呆けた感じで)・・・わあ」

ネコ「ちょっと!!!!!!」

ヒイラギ「(感動して) すごい!!!!!!」

ネコ「大学生になると触れられたくないプライベートが増えるのですが」

ヒイラギ「(聞いている) すごい!!!!!! もっと見たい!!!!!!」

ネコ「わかったわかった。そういえば、ほらこれ」

ネコ、キュウリの馬を取り出す。

ネコ 「お盆だから作ってみた」

ヒイラギ 「これなに？」

ネコ 「キュウリの馬。出来たらすぐ来たから効果あるんだって」

ヒイラギ 「そんなの乗ってこないよ、私」

ネコ 「知ってるよ、ロマンの話でしょロマンの」

ヒイラギ 「ロマンって何？」

ネコ 「それ止めて！ 終わんなくなるでしょ！」

ヒイラギ 「ん」

ネコ、突然居住まいを整えて座る。

ヒイラギを座らせる。

ヒイラギ 「・・・なに？」

ネコ 「(改まって) 今年は私からお願いがあります」

ヒイラギ 「お願いですか」

ネコ 「お願いします」

ヒイラギ 「願い事？」

ネコ 「そ」

ヒイラギ 「・・・私、神様じゃないよ？」

ネコ 「知ってるよ。てか、神様は全知全能なのに、あんた無知蒙昧じゃん」

ヒイラギ 「えへへ」

ネコ 「褒めてない！ だから、違くて。お願いがあります」

ヒイラギ 「はい。お願い聞きます」

ネコ 「今年は私がヒイラギの中に入りたいんです」

ヒイラギ 「・・・ん？」

ネコ 「いや、ほら、私、今、町で暮らしてんじゃない？ で、ずっと実家から出られないんだあ、やだなあって思ってたんだけど、結構簡単に出られたんだよ」

ヒイラギ 「うん」

ネコ 「で、思ったの。やりたいなって思うことって思ってるより簡単なんじゃないかなって。だから——」

ヒイラギ 「私の方に来るの？」

ネコ 「うん。やっぱ無理？」

ヒイラギ 「(何かを調べて、独り言のように) えーと・・・。あ~~~~、できないことないのか・・・。でもなあ・・・」

ネコ 「でも？」

ヒイラギ 「一応、リスク、ある、かも」

ネコ 「どんな？」

ヒイラギ 「わかんない。(技術的な部分の) 理屈は、なんていうか・・・説明しにくいよ」

ネコ 「まあ、でも、できるんでしょ？」

ヒイラギ 「うーん・・・」

ネコ 「ねえ！」

ヒイラギ 「・・・わかった」

ネコ 「よっしゃ！」

ヒイラギ 「じゃあ、いい？」

ネコ 「え？ いきなり？」

ヒイラギ 「だって、別に準備なんて要らないでしょ？」

ネコ 「心の」

ヒイラギ 「心じゃん。あ、でも、無重力だから、ちょっと酔うかも」

ネコ 「無重力！ おお」

ヒイラギ 「あと、私の体、あんまり見ないで」

ネコ 「なんで？」

ヒイラギ 「見ればわかるよ」

ヒイラギ、ネコの手を取り、ハイタッチ。

ネコ、ヒイラギの体へ。

ヒイラギ、ネコ、小さくうずくまる。

ふわりと浮かび上がる二人の体。

ネコ 「・・・成功？」

ヒイラギ 「うん」

ネコ 「まじ？」

ヒイラギ 「まじ。大丈夫？」

ネコ 「うん。わ、体、軽っ」

ヒイラギとネコ、似たような動作で互いに近づく。

鏡合わせのように互いのことを見て。

ヒイラギ、どこか緊張している。

ネコ 「(ヒイラギの腕を見て)・・・ヒイラギ？」

ヒイラギ 「見ないでって」

ネコ 「指、長」

ヒイラギ 「うん」

ネコ 「足、短」

ヒイラギ 「重力ないから」

ネコ 「ヒイラギ」

ネコ、ヒイラギの顔に触る。そしてヒイラギも。

ネコ、ヒイラギ、互いの顔に触って、

ネコ 「これが、ヒイラギ」

ヒイラギ 「はい、これが私です」

ネコ 「顔は普通なんだね。顔色めちゃくちゃ悪いけど」

ヒイラギ 「まあ」

ネコ 「・・・初めまして、ヒイラギ」

ヒイラギ 「照れくさそうに）・・・ようこそ、わが家へ」

二人、笑う。

ネコ、ヒイラギの部屋の様子を見る。

ネコ 「ここがご先祖様の中？」

ヒイラギ 「そう。アンセスタの管理室」

ネコ 「窓から見える地球を見て）あ、地球！ほんとに宇宙だ！」

ヒイラギ 「綺麗だよね」

ネコ 「あ、星！すごい！ 宇宙、黒い！（感動して言葉にならない）わあ、わああ」

ヒイラギ 「そんなすごいかな？」

ネコ 「（興奮して）すごいよ、マジヤバイ！」

ヒイラギ 「まじやばい」

ネコ 「まじやばいって（笑）」

二人、再び笑いあう。

ふと、ネコ、ヒイラギ振り返る。

何かたくさん装置がうなり声をあげて稼働している。

ネコ 「（装置を見上げて）これは？」

ヒイラギ 「（どこか冷たく）冷凍睡眠装置。眠ってる、みんな」

ネコ 「これが、家族？」

ヒイラギ 「そう。遺伝子操作で生まれて、睡眠学習で成長して、任期の間だけ起きて、みんなの管理とシンクロ作業して、また眠る」

ネコ 「(装置を見ながら) ずっとこの場所に一人でいたの? 寂しくないの?」

ヒイラギ 「寂しくはなかったよ。最初のうちは、でも——」

ネコ 「お墓みたいだね」

ヒイラギ 「え?」

ネコ 「冷たくて、静かで。寂しい」

ヒイラギ 「うん」

ネコ 「でも、いつか目が覚めるんだよね?」

ヒイラギ 「わからない。目覚めないままに死んじゃう人もいる」

ネコ 「ヒイラギも?」

ヒイラギ 「(寂しげな顔で) うん。わかんない。ひょっとしたらずっと生き残って、何百年

後か何千年後かに地球に降りて、みんな起きて、みんな——」

ネコ 「したら、海に行かなきゃ!」

ヒイラギ 「・・・不味い焼きそばを食べるの?」

ネコ 「そう! で、帰ってきたらスイカを食べるんだよ」

ヒイラギ 「食べてばかりじゃん」

ネコ 「かき氷もいっとく?」

ヒイラギ 「お腹冷えるよ」

ネコ 「それなら——」

突然、ネコとヒイラギ、倒れる。

ネコ、ゆっくりと起き上がる。

ネコ、周囲を見回して、

ネコ 「ヒイラギ・・・?」

4 夏の時間

ヒイラギ、宇宙船の船内であおむけに倒れている。
しかし、目は見開かれている。

ヒイラギ、腕を伸ばし、何かを掴もうとする。
ネコ、ネコの孫となる。

ヒイラギ「(ぼそぼそと早口で) ひらひらと揺れている風鈴が天井からつり下がっている。
天井が見えているということは、床に寝ているということである」

ネコ「その時がお話をした最後だったって、おばあちゃんが言っていました」

ヒイラギ「外からの空気を遮る壁は部屋の中の湿度を保っている」

ネコ「おばあちゃんはとっても寂しそうな顔で笑いました」

ヒイラギ「クーラーの風を、扇風機でまわし、団扇で仰ぐような、あたかも人工的な循環」

ネコ「あの時のことは夢みたいなことだったと、おばあちゃんは言っていました」

ヒイラギ「であるかのような、快適さを求め、外敵を排除する」

ネコ「それでも、おばあちゃんはずっと待ち続けていました」

毎年毎年夏の夕暮れ時に、キュウリの馬を作って、空を見上げて待っていました」
ヒイラギ「我々の、手本ともいえる姿勢は決してまっすぐに伸びておらず、いびつな形をしている」

ヒイラギ「しかしながら、外を見なければ、そのことにも気づかないのである」

ネコ「私はおばあちゃんに聞きました」

『誰を待っているの?』と、聞きました。

そうしたらおばあちゃんは言いました」

ネコ「(遠い空を見上げて) 宇宙人みたいな長い指と短い脚をして顔色の悪い、妹みたいな、私のことをネコって呼ぶ、冷たいお墓の中に一人で寂しく過ごしてる、友達を、待っているの」

ヒイラギ「この壁はどこまで続くのだろうか。」

ここから いつ 出られるのだろうか。

誰もいないこの部屋に、誰かがいる気がする」

ヒイラギとネコ、ゆっくりと起き上がる。

互いに向き合う。

ヒイラギ「宵闇歩き、実行」

ネコ「失敗。エラーを修復してください」

ヒイラギ「実行」

ネコ 「失敗。エラーを修復してください」

ヒイラギ 「実行」

ネコ 「失敗。エラーを修復してください」

ヒイラギ、ネコ、両手を合わせる。

ヒイラギ 「実行。招き入れるなんてしなければよかった」

ネコ 「失敗。私たちの時間はずれていく」

ヒイラギ 「実行。毎年やってきたあの夏が」

ネコ 「失敗。一分一秒とずれていく」

ヒイラギ 「私の時間とネコの時間がずれていく」

ネコ 「同じ空が消えていく」

ヒイラギ 「アンセスタがエラーを吐き出す」

ネコ 「深刻なエラーを吐き出して」

ヒイラギ 「もう、同じ時間に生きていないことを告げている」

ネコ 「ヒイラギ、あんたいつになったら帰ってくるの？」

ヒイラギ 「ネコ、私の一年があなたの100年になって」

ネコ 「ヒイラギ、冷たい宇宙船の中で寂しいでしょう？」

ヒイラギ 「ネコ、私の一年があなたの200年になって」

ネコ 「ヒイラギ、お墓に入るのは怖いでしょう？」

ヒイラギ 「ネコ、私の一年があなたの300年になって」

ネコ 「地球が回る」

ヒイラギ 「ぐるぐると回る」

ネコ 「自転の早さは目まぐるしくて」

ヒイラギ 「一周のスピードはグングン増して」

ネコ 「もう、」

二人 「私たちの時間は決定的にずれてしまっ」

ヒイラギ 「デルタ」時間は反転して」

ネコ 「記憶フレームが遅延して」

ヒイラギ 「年次ベースで6.14833の周期ズレ」

ネコ 「対象との整合性が失われていく」

二人 「グングン回る。ぐるぐる回る」

ヒイラギ 「ズレは修復できない」

ネコ 「だから祈るしかない」

ヒイラギ 「祈って、ボタンを押し続けるしかできない」

ネコ 「実行」

ヒイラギ「失敗」
ネコ「実行」
ヒイラギ「失敗」

ヒイラギ、苦しく悲しそうな顔。

ヒイラギ「実行！」
ネコ「（おどけて）失敗」
ヒイラギ「実行！！！」
ネコ「（おどけて）失敗です」
ヒイラギ「実行！！！！！」
ネコ「失敗しました」

ヒイラギ、ふさぎ込む。

ヒイラギ「・・・ネコ」

ネコ、ヒイラギに近づき、

ネコ「宵闇歩き、シンクロ成功」
ヒイラギ「！！！」
ネコ「シンクロ、実行しますか？」
ヒイラギ「実行・・・実行します！！！」

ヒイラギ、ネコ、ハイタッチ。

ネコ、倒れる。ヒイラギは立ったままである。
二人、目を見合わせる。

ネコ、にやりと笑って。

ネコ「ああ、ヒイラギだ。久しぶり」
ヒイラギ「・・・ネコ？」

ヒイラギ、ネコの顔を触る。
ネコも、ヒイラギの顔を触る。

ネコ「何年待ったと思ってんの」

ヒイラギ「ネコ？」

ネコ「ネコ？・・・そうね、ネコって呼ばれてたね、私。ネコだったね」

ヒイラギ「会いたかった、もう会えないかと思った、ネコ、ネコおお・・・」

ネコ「ちょっと、人の頭の中で泣かないで、うるさいから」

ヒイラギ「（少し落ち着いて、ネコの様子を見て）・・・変わった？」

ネコ「変わったかもね」

ヒイラギ「・・・皺だらけ」

ネコ「そりゃあね」

ヒイラギ「病気？」

ネコ「失礼な」

ヒイラギ「あと、体中が痛いし、動かない。やっぱり病気でしょ？」

ネコ「失礼な」

ヒイラギ、異変を感じて周囲を見回す。

ネコの周りにはネコの家族がいる。

ヒイラギ「誰？この人たち」

ネコ「子供。孫も、ひ孫も、家族」

ヒイラギ「家族？こんなにいっぱい？」

ネコ「まじすげえでしょ」

ヒイラギ「なんで集まってるの？」

ネコ「そりゃあ、」

ヒイラギ「・・・ん？」

ネコ「（何か含みをもって）・・・ホントに久しぶり、ヒイラギ」

ヒイラギ「久しぶり？」

ネコ「お盆は過ぎたけど、やっときてくれた」

ヒイラギ「ネコ？」

ネコ「毎年毎年、この時期にあんたが来るのを待っていた」

ヒイラギ「毎年？どれぐらい・・・？」

ネコ「もう会えないんだと思ったよ。ホント。でも、最後の最後ですごいタイミングで来たね、ヒイラギ。人様の臨終に立ち会うなんて。光栄に思いなさいよ」

ヒイラギ「・・・臨終って何？」

ネコ「死ぬの、あたし」

ヒイラギ「え・・・」

ネコ「ああ、違うな。あんたに会いに行くのよ。あの時、あんたの中に入った時みたい
に。キュウリの馬に乗って、会いに行く。」

まだ、そこにいるんでしょう？ ヒイラギ。一人で寂しく宇宙の真っ黒の中にいる
んでしょ？ お墓みたいな機械に囲まれて、寂しい寂しいってべそかきながら
一人で眠るんでしょう？」

ヒイラギ「ネコ？」

ネコ 「もう、何も聞こえない。何も消えないのに、あんたの声だけ聞こえる気がしてた。
孫の声も、セミの鳴き声も、風鈴の音も、花火の音も、色も、かすんで、夕焼け
も、かき氷も、山も全部、ただの灰色になって、でも、あの時の夏の匂いとはとっ
てもよく覚えてる。

・・・ヒイラギ、そこにいる？」

ヒイラギ「ここにいるよ、ネコ」

ネコ 「またね、ヒイラギ」

ネコ、息絶える。

ネコ 「シンクロ途絶。シンクロ可能者、生命活動の停止を確認。

エラー状況、復旧レベルまで進行、時間軸およびシステム正常化の為、生命維持
装置以外のアンセスタ全機能を再起動。乗組員は直ちに睡眠装置モードへ移行
してください。再起動終了時間は――」

ヒイラギ「咳をしても一人」と、誰かが言った」

ヒイラギ、ネコと見つめ合う。

ネコ 「空虚な空間が床をつたって広がっていくように」

ヒイラギ「伝わるか伝わらないか、わからないほどの目に見えないエネルギーが」

ネコ 「確固たる壁を通り抜けてゆく」

ヒイラギ「誰かが、ここにいる自分を差し置いて、全速力で通り抜けてゆくのである」

二人 「追いつくことのできない夏が、そのまま秋になってゆく
暑さが残っている。というよりはまだ、暑いのである」

ヒイラギ「・・・またね、ネコ」

ネコ 「・・・またね、ヒイラギ」

ヒイラギとネコ、手を取り合い、丸くなって、眠る。

※注釈

作品内の詩は、空間アーティスト・大橋夏実様からの詩作品を使用。
当該作品は提供テキストを元に中野が戯曲執筆した作品となります。

終